

令和元年1学期 保護者会 4年間の研究開発指定校として学校研究について

東京学芸大学附属世田谷小学校
研究部

研究開発課題

未来社会を創造的に生きる「学びを自分でデザインする子」を育成する、
個に基づく「じぶんdeラボ」と、教科・学年を超えた協働的探究の「みんなdeラボ」の双方で駆動する教育課程及び学習環境デザインの研究開発。

2019年6月25日本校松浦執先生教養講座

「ぼおって生きていたい親に子は何を期待しているのか」より

- 附属学校の存在意義が問われている

公共性を高めることが求められている

この国の教育のために、変わり続ける附属学校であるべし

- 研究開発指定校について「失敗してもいい」

子どもの「教育」の効果の上では研究に入った時点より子どもを悪くしないということが最低の倫理として前提になる。

- 大人ができることは？

子どもにとっての選択肢のバラエティーをつくること

選択肢は我々大人とは違う。広い心をもつことが大事。

- 新しいパラダイムの学校が注目されている。世界トップ10の学校になれるか？

本校は文部科学省研究開発校 (令和元年度～4年度)になりました。

文部科学省研究開発校制度とは？

研究開発学校制度は1976年（昭和51年）に創設された教育課程の改善に資する実証的資（evidence）を得て、行政に役立てるための制度である。「研究開発学校」の研究結果は**その次以降**の学習指導要領の資料となる。2020年度から始まる平成29年度告示の学習指導要領の議論は終わっているため、今年度から始まる開発学校の研究は、**10年後もしくはそれ以上先の教育課程や教育政策をつくるための研究**となる。そのため**研究開発校には現行の教育課程の基準によらない教育課程の編成が認められている**。

研究開発校の指定は**公募制**であり、文部省からの一方的な学校指定ではない。研究開発課題も一方的な指定ではなく自発的な研究開発であり、採択の基準は以下の通りである。

- ① 研究開発実施計画は、各学校のおかれた諸条件・特色等を勘定した上で、実践的かつ創造的に作成されているか。
- ② 学校全体として組織的に研究開発に取り組む体制や、それを**支援する体制が整備**されているか。
- ③次期以降の教育課程の基準の改善に資するという研究開発の目的に適合しているか。

要は、オルタナティブ（型破り）で魅力がある計画であるか。

それが理解され、支援する体制ができているか。

一般化の可能性を探ることができるか。

研究課題

未来社会を創造的に生きる「学びを自分でデザインする子」を育成する、
個に基づく「じぶんdeラボ」と、教科・学年を超えた協働的探究の「みんなdeラボ」の双方で駆動する教育課程及び学習環境デザインの研究開発。

社会的背景

工業社会→情報化社会→超スマート社会
(現在) (Society5.0)

変わりゆく時代の中でよりよい人生と社会を求める資質・能力を育成する学校
意欲 人間性の涵養 熟考する力 感性 コミュニケーション能力など
自ら創造し、創造していく過程を省察することをによって育成され、高められる

本校の研究の経緯

はじめに子どもありき 相互啓発的学習観 自分の学びに自信がもてる子ども

本校の子どもたちの課題

全体の学びを自分の問いや自分の考えや学習計画などに関連づけ深く学ぶ子ども

⇒ 問いをもつ、自分の考えをもつ、計画を立てることに消極的な子ども

変化する社会に主体的に関わり、よりよい社会
や幸福な人生の造り手となるための力

評価・検討 (4年次)

「学びを自分でデザインする子」を育てるカリキュラム

個←集団

個別的探究の時間
じぶんdeラボ
※「じぶんdeラボ」・
「みんなdeラボ」設置
委員会を中心に検討

自らトピックを設
定して探究する、
個の活動と集団の
活動のサイクル

協働的探究の時間
みんなdeラボ
※「じぶんdeラボ」・
「みんなdeラボ」設置
委員会を中心に検討

Topic Map等の
活用による支援

個→集団

知識や技能の活用
興味関心の発展

知識や技能の活用
興味関心の発展

評価検討 (1年次)

ベースとなる知識や技能を学ぶ教科領域の時間

※「各教科で育てる資質・能力等についての検討委員会」を中心に検討。

※本校の「総合学習」については、既存の領域でありながらラボ活動との関連性も高いので、特に
「『総合学習活動』で育てる資質・能力等についての検討委員会」を中心に検討。

※オンライン学習システムの導入による個別学習の支援を行う。

開発研究フォローアップしてくださる 運営指導委員の先生方（令和元年度）

藤江康彦先生（東京大学 教授）
教育方法学



上野正道先生（上智大学 教授）
教育哲学・カリキュラム論



益川如弘先生（聖心女子大学 教授）
教育工学・認知科学



恒吉僚子先生（東京大学 教授）
教育社会学

未来社会を創造的に生きる「学びを自分でデザインする子」を育成する、個に基づく「じぶんdeラボ」と、教科・学年を超えた協働的探究の「みんなdeラボ」の双方で駆動する教育課程及び学習環境デザインの研究開発。

「自分自身をデザインする」

小学校段階では「学びを自分でデザインする」

デザインという言葉に込めた願い

デザインという言葉にはには、形容する言葉の概念と向き合い、じっくりと考えるという働きがある。「自分自身」「自分の学び」に向き合い、真剣に考える子どもに育てていきたい。

子ども観

子どもは自ら文化創造できる存在である。

子どもの好奇心・探究心に根ざした学びを創造する。

子どもには向き不向きがあるのではないかしら？
子どもをどのように支えていけばいいのでしょうか？
(教養講座での保護者の方からの声)



新設の時間

じぶんdeラボ

- ・一人一人のそれぞれのよさや興味関心を発揮して追究する活動
- ・「与えられたもの」を学ぶのではなく、主体的な探究や知識構築の場とする

子どもが自分で学びを
デザインできる時間

みんなdeラボ

- ・異学年で学びの集団を形成し、自分たちで設定したテーマに向かって追究を深めることにより協働的に課題解決する力を高める場
- ・子どもの認知や発達段階による価値観のずれが学びを深めていくことを視野に入れる。

「じぶんdeラボ」「みんなdeラボ」設置委員会

現在

低学年

じぶんの時間 → 3年生以降の家庭学習（自学ノート）

みんなの時間

総合学習

教科での経験

生活実践活動

自分で学びをデザイン
する子どもを育成する
ために、必要な経験を
重ねる時間をつくる

中学年・高学年

各教科

音楽発表会

卒業研究・制作

総合学習

クラスのテーマの時間

生活実践活動

クラブ(同好会) 活動（藤棚の活動）

生活実践活動

※教育課程および **教科の本質** 検討委員会

伴走者としての教師（大人）のあり方
（評価活動）

- ・子どもの意欲をどのように育み、支えるのか

子どもが

- ・何に取り組んでいるのか

- ・問いは何か

- ・必要な学習環境は何か

- ・どのような学びを展開しようとしているのか

教育課程および学習評価委員会

自分で学びをデザイン
する子どもを支える大
人のあり方を研究する。

自分で学びをデザイン
する子どもを支える
新・旧を問わない学習
環境の構築。

学習環境 ブランディットラーニングという考え方

旧 自然環境（ネイチャーゾーン）

体験活動（畑・造形広場）

地域・家庭

新 オンライン学習システム

（Classroom, せたち++）

⇔自己評価・相互評価

外部リソース

学習環境デザイン構築委員会

教育課程および学習評価委員会



学習環境デザイン構築委員会

教育課程および教科の本質検討委員会



「じぶんdeラボ」「みんなdeラボ」設置委員会